

【設定の理由】日々の遊びの中で、子どもたちは植物や虫などの自然物に触れ、その状態や変化について興味を示している。自然物をもっと身近に感じ関わりをもつことで、新しい発見や好奇心から喜びを感じられるようにするため。

【事例1】

* 活動名：ござ作り * 活動のねらい：自然物を使って、試したり考えたり工夫することを楽しむ

* 活動内容：とうもろこしの皮を使ってござ作りをする * 用意した環境：とうもろこしの皮・段ボール・タコ糸



★子どもの様子

とうもろこし狩りの体験から、保育者がとうもろこしの皮で物が作れることを話すと驚いていた。また、匂いを嗅ぎ、ござや畳の匂いのようにと話していた。皮を乾かしても崩れることがなく、自分で引っ張ってみて切れないことがわかった。友だち同士で引っ張り合う姿が見られた。手作りの編み機を使って編み方を教えてもらおうと、複雑な編み方でも器用に編む子どもがいた。編み方が分からない時は、友達同士で教え合いながら作っていた。完成すると、クラスの話し合いで、「体休めの時に枕にすると良い」と子どもたちから意見が出され、毎日使用していた。

★保育者の振り返りと気づき

とうもろこしの皮の性質について興味を示していたので、皮が再利用できることを知らせた。皮から何ができるかという話題をきっかけに、編み機を使うことを提案した。楽しんで取り組んでいるうちに、子どもから「編んだ物をござにしてみようか」と意見が出て、何に使ったら良いか考える姿が見られ、保育者が思いもつかぬ用途を自分たちで考えた。ござ枕は体休めをしていた冬頃まで使用し、愛着を感じている様子だった。畑の収穫物や身近な栽培物を再利用し大切に使う気持ちが、子ども一人一人に芽生えていると感じられた。

【事例2】

* 活動名：植物をすりつぶして絵を描く

* 活動のねらい：すりつぶし方を考えたり、匂いを嗅いだりして野菜の性質を知り、絵を描いてみる

* 活動内容：人参をすりつぶした汁で、絵が描けるのか試してみる

* 用意した環境：人参、すり鉢、すりこぎ、はさみ、画用紙、筆



★子どもの様子

これまですりつぶしてきた草花とは違い、人参は大きくて硬く、そのままの状態では潰せなかった。「ハサミで切ってみたらどうかな？」と声上がり、鋏で小さく切ってからすり鉢とすりこぎですり潰してみると、すり潰し易くなった。色が出始めると濃く、人参の匂いがしてきて、「これなら描けそう」と話していた。汁で描いてみるとオレンジがかった薄い茶色っぽい色だったことに気づいた。色が付いたことに大喜びし、保育者に教える姿や、汁に水を混ぜて濃淡をつけて絵を描いてみたりする姿が見られた。

★保育者の振り返りと気づき

人参のすり潰し方を子ども同士の話し合いで決めていた。必要な道具を子どもたちがすぐに使えるよう用意しておいたことで、自分たちで考えた方法をすぐに実践できた。また、友達と一緒に協力して行うことで、互いの考えや発見を共有したり、水の量で色の濃さを変えられることなどを発見したりする姿が見られた。保育者は最初からやり方や答えを伝えるのではなく、子ども同士で考えたり発見したりできるように、言葉かけのタイミングや内容を考えながら、意欲や興味が高まるような働きかけをし、活動を広げて行く必要がある。

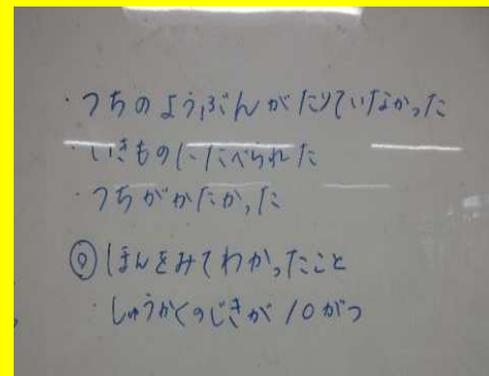
【事例3】

* 活動名：芋ほり

* 活動のねらい：自分たちで育てた芋を収穫することを経験する

* 活動内容：保育園の畑で芋ほりをする

* 用意した環境：シャベル



★子どもの様子

「芋できてるかな？」と子どもたちの期待感が高まる中、手やシャベルを使って慎重に芋を探してみたが見つからず、場所を変え何度も掘ってみたが、芋を収穫することは出来なかった。しかし、芋のつるを引っ張ってみると大縄のように長く、縄跳びの縄にして跳んでみたり、クリスマスリース土台作りをしたり、「リレーのバトンみたい!」と話すなど、長いツルがいろいろなものに使えたり見立てられたりすることを発見していた。芋ほりの後にクラスで、「なぜ、芋ができなかったのか」について考えたり、図鑑でさつま芋の育て方について調べたりして、植物を育てることの難しさをクラスで確認することで、さらに植物への関心が深まっていた。

★保育者の振り返りと気づき

今年是不作で、畑に芋はできていなかったが、子どもたちは、芋は絶対にあると信じて「見つかるまで」と土の中を探し続けていた。納得いくまで掘った後は、意外とすんなり気持ちを切り替えて、芋のツルを使っての遊びに移行した。ツルを使った縄跳びなど、面白い使い方を自分たちで考え出したり、見立てて遊んだりする姿が見られた。本来の成果が得られなくても、次の行動へ繋げるためにはどうしたら良いかを考えられるようになってきているのは、これまでの失敗からのやり直し経験や、試行錯誤する経験から繋がっているのではないかと考える。保育者が失敗と決めつけるのではなく、そこからの子どもの発見や好奇心を大切に、興味や関心が広がる援助をしていきたい。